SRID NEWSLETTER

No. 330 MAY 2003 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

5
~~6~~月号

そうだ！我々が変わらなくては！　会長就任にあたって

国際基督教大学教授　高橋一生

ナイロビのストリート・チルドレン救済プロジェクトについて

国際開発アソシエイツ(IDeA)　堀内 伸介

お知らせ

1．新入会員　西村　恵美子　国際協力事業団
〒151 - 8558　渋谷区代々木　2－1－1
TEL 03-5352-5029　FAX 03-5352-5032
E-mail [illegible]
自宅 〒167-0054 [illegible]

2．会員異動　不破　吉太郎
法政大学大学院教授　（社会科学研究科　環境マネジメント専攻）
〒162 - 0843　新宿区市谷田町　2 - 15 - 2
FAX [illegible]
自宅 [illegible]

大嶋　清治
次世代半導体材料技術研究組合
〒[illegible]
TEL 042 - 327 - 8094　FAX 042 - 327 - 8094
E-Mail [illegible]

自宅移転　荒川　博人　〒[illegible] 茅ヶ崎市[illegible] 2 - 21
TEL [illegible] - 88 - [illegible]　E-mail [illegible]

そうだ！我々が変わらなくては！
会長就任にあたって

国際基督教大学教授　高橋一生

1．　できることはやった

半世紀以上の国際開発のバランス・シートを単純化して１００点満点で採点してみるとおよそ次のようになるのではなかろうか。

社会開発	55 点
経済開発	50 点
ガバナンス	20 点
環境	10 点

トータルでみると 400 点満点で 135 点。これをどのように考えるか。この極めて独断と偏見に満ちた採点(世界の大方の専門家は大体賛成してくれると信じるが)は、小生には、一方通行国際開発の実績であると思う。今までの方法は、途上国の自助努力を中心とし、それを主として先進国が資金、技術、知恵などで補完し、それに多少貿易上の優遇を加味するというやり方であった。この手法の完成度を向上させるという方法でできることはかなりのところ実行してきたといってよいであろう。今後、この方法を前提とした国際開発は、今まで行なってきたことを、めまぐるしく変化する状況にさらによく適合させることなのであろう。この手法の完成度を高めることによって、135 点を 170 点ほどに上げることは可能であろう。

2．　とり残された主な分野は？

環境とガバナンスの点が特に低いが、なぜなのだろう。この両方に共通していることは、表面上は、共に途上国自身の努力が中心課題であるようにみえて、実は、その両方を弱体化しているのは先進国及びその企業の活動である。環境に関しては、特に指摘するまでもないであろう。ガバナンスについての最も大きな問題は贈収賄を通じた腐敗体質であることは 1997 年の世銀の「世界開発報告書」の指摘する通りである。環境に関しても、また、ガバナンスに関しても、問題のかなりの部分の責任は先進国にある。この二つの分野を改善することによって、はじめて社会開発と経済開発のパフォーマンスもさらによくなるのであろう。

3．　途上国から学ぶ

このことは、途上国の現実そのものから我々が学び、我々の価値判断、行動を修

正することが途上国の開発の必須条件になってきた、ということを意味する。途上国の状況を分析するのは我々の仕事であったが、それを“我々”に結びつけるのは、かつては“帝国主義論”、“デペンデンチア論”もしくはそれらの亜流であった。今、それらの大上段にふりかぶった仮説を抜きにしても、国際開発の実績から見て今後の課題を考えてみると、途上国から学び、我々が変わることが重要であることがわかる。途上国に教え、与えるのではない。彼らから学ぶこと自体が我々の大事な課題になってきた。

4.　開発の主要課題化(メインストリーム化)

それは、取りも直さず、国際開発を先進国内でメインストリーム化することである。途上国から、学び、我々の国及び社会が変わらねばならないということは、我々がクニを変える触媒になる必要がある、ということを意味する。今まで、途上国のことは“援助＝ODA”に閉じ込め、社会の傍流としておくことが、先進国の仕掛けとしては正解であった。なぜなら、世界は、基本的には先進国間関係で動いていたから。しかし、ガバナンスの弱体化がテロを招き、環境破壊が地球全体の課題となる状況で途上国の開発を広くとらえ、そのパフォーマンスの向上をはかることが、先進国自身にとっても重要な課題になってきた。そうすると、“開発”を“援助”に押し込め、貿易と投資で多少の考慮を加えることが国際開発の実体であったものが、先進国の社会体質そのものが国際開発にとって切実な課題になってきた。先進国にとっては、いよいよ本格的に、多くの異質な要素をかかえる途上国世界と向き合い、その異質さを糧として、自らの社会の質をさらに豊かにしてゆくことが課題になってきた。その触媒である我々が先進国の今後の転換の先導役になる必要があるのであろう。

5.　さてSRIDは？

援助が先進国社会の片隅の優しき人々の仕事であった時代から、途上国から学ぶことを通じて、我々の社会そのものを変えることが重要な国際開発の課題になろうとしている。この時代に、仲間同士の対話のためのクラブであるSRIDは、このままでいいのだろうか？対話の内容を変え、質を高める努力だけでよいのだろうか？小生には、ただちには解答がない。現在、小生ができることはこの問いを発することである。

ナイロビのストリート・チルドレン救済プロジェクトについて

国際開発アソシエイツ(IDeA)　堀内 伸介

今回は国際開発アソシエイツがJICAの開発パートナー・プログラムの下で約2年実施してきたストリート・チルドレン（ＳＣ）のプロジェクトについてご報告させて戴きます。

東京では(IDeA)がプロジェクトの受け皿になっていますが、ナイロビで20年近くも孤児院を経営してきたナイロビのNGO、SCC（Save the Children Center、代表は菊本 照子さん）が、約20人のケニア人スタッフと共に実際の事業を行なっています。ナイロビもアフリカの他の都市と同様にＳＣが増加しています。平均寿命は14才とも言われ、病気、犯罪、麻薬等で亡くなる子供が多く、都市の治安の面からも大問題ですが、それよりも子供達の人権問題です。人間としての可能性を伸ばせないで亡くなる訳です。

我々のプロジェクトは二つの30万人以上のスラムと二つの1万人以下のスラムを対象にして活動しています。このプロジェクトは一年以上もかけてスラムの住人と対話を重ね、PCM手法を使って、作り上げました。SCに物やお金を上げることはせずに、ケニア人スタッフによるカンセリングが主です。子供から始まり、その母親、スラムの青年と活動は広がっています。カンセリングの目的は、子供達、青年達、母親達と一緒に彼等の問題を考え、そのなかで自分達で出来る事を見出させ、自助努力を後押しすることです。子供達のmind-setを変えるのが目的です。多くのNGOが同じ分野で活動していますが、どちらかと言えば、物を容易に上げて依存心を増加させているのではないかとおもうことがあります。それは援助ではありません。慈善事業です。

具体的な活動は、先ず子供達との接触から始まります。毎日のサッカーの練習、週2のスカウト訓練、週1の音楽教室、毎日の識字教室、集団医療、週2の給食と検診などが主です。子供達を決して誘わない。彼等が入れてもらいたいというまで、じっと待つ。2年間で、正確に計算したことはありませんが、延べ3万人近い子供達と接触しています。子供達がスタッフに自分の問題、学校に入りたい、手に職をつけたい、母親のもとに帰りたい等々を話し始めた時に、それでは子供達に何が出来るのか、親に何が出来るのか、カンセリングを始め、彼等に考えさせるのです。例えば、子供が学校に行きたいと希望した時、その親を見付け出して、話をします。お金がないから子供を学校にやれない、という親には、お金をやらず、お金を稼ぐことを薦めます。親にいろいろな職業を見せ、自分に出来そうな職業を選ばせ、その訓練を助けます。縫製、美容師、パン焼き、手工芸等々です。これも強制しない。自分が変わらなければ、自分の生活は変わらないことを理解させま

す。子供と一緒に故郷の村に帰りたいというときは、スタッフが村に出向いて、親戚、縁者と話しをします。受け入れてくれる村もあれば、受け入れてくれない村もあります。しかし、村の生活に帰るのが一番良いと思っています。

青年達とPCMを使って、彼等の問題を一緒に考えました。その結果、自分たちが失業している理由の一部は、手に職がないからであるということで、自分たちの手で家具製作の訓練所を作りました。足りない道具、材料の援助を求めてきますが、プロジェクトのスタッフが会合して、要請を緊急性であるとか、さらに前進するためになるとか、依存心を増加しないか等々議論して、助けることもあります。

子供達は学校、家庭に帰ったり、母親達はパン焼，手工芸などいろいろな仕事を始めています。青年達もコンポストを作り、販売したり、家具、木のおもちゃ等々仕事をしています。なかなか自活できるまでには行きませんが、我々にお金をくれ、物をくれとは決して言いません。自分で自分の生活を切り開いて行こうとしています。依存心から mind set が変わったのです。その努力を我々のプロジェクトが後ろから押して支援しています。援助の原型を見る思いです。（ご興味のある方は、国際開発アソシエイツへ、定期的報告書も中間評価報告書もあります。）

夏のシンポジウムのテーマについて

総会でも報告しました通り、今年度も日帰りの一日型のシンポジウムを7月26日（土）に予定しています。（まだ　日にちは決定ではありません。）

5月6日の幹事会で、シンポジウムで討論されるテーマについて話あわれました。その結果以下　4つのテーマを夏のシンポジウムの候補に上げましたので、会員の皆様のご意見をシンポジウム幹事または事務局にお寄せください。

テーマ候補

1．紛争と開発・復興　　一紛争後の復興支援のあり方、紛争予防

2．開発援助の新しい潮流一結果重視アプローチ、評価

3．アメリカの一極支配と開発問題

4．開発問題の変質　一深刻化するグローバルイシューと多様化するプレイヤー